

民主主義と独裁についてのローザ・ルクセンブルクの思想

(中国新聞社駐日記者) 楊 国光

ローザ・ルクセンブルクの民主主義と独裁についての記述、とりわけその民主主義思想をいかに見、いかに評価するかは、これまで歴史学者が関心を寄せ、くりかえし検討してきた問題である。主として民主主義と独裁の問題でローザがレーニンとボリシェビキを批判し、それがまた十月革命の敵に曲解され利用されたことから、国際共産主義運動のなかでは、ローザの論述は有益な部分であろうと、一面的な部分であろうとにかかわらず、長い間一律に否定され、誤りとされた。したがって、实事求是（実際をあるがままに）の精神でこの問題に当たることは、ローザとその思想を公正に評価するうえで助けとなるものであるように思う。

1917年、第1次世界大戦の4年目、レーニンははじめとするボリシェビキ党に率いられたロシアのプロレタリアートはブルジョアジーをくつがえして、十月革命の勝利をかちとり、世界最初のプロレタリアート独裁の社会主義国家をうち立てた。ローザがちょうどドイツの獄中にあったときのことである。十月革命勝利のニュースは春の訪れを告げるかのようにローザを大きく励ました。ロシア・プロレタリアートとその政党に、彼女はヨーロッパ革命の未来をみてとったのである。1918年の秋、ローザはロシア革命に対する獄中での思考と探索をもとに、「ロシア革命論」の執筆にとりかかるが、それはのちドイツにおいて十一月革命が勃発したため中断、未完成の原稿となり、生前発表されることなく終わった。このなかには「国の未成熟」を口実に権力の奪取を放棄し、十月革命を攻撃したカウツキー一味に対するきびしい批判、

また、ボリシェビキの革命後の政策と戦術に対する批判をも含んでおり、後者はブレスト平和条約、民族自決権、土地問題などに触れているが、ここでは民主主義と独裁の問題にだけ触れる。

ローザは十月革命の勝利を謳歌し、ロシア・プロレタリアートとその政党が立てた大きな功績を十分に肯定し、レーニンとボリシェビキが「社会主義の最終目標を実際政治の当面の綱領としてはじめて打ち出し」、自己を世界プロレタリアートの前衛たらしめた、とほめたたえた。彼女によれば、レーニンの党こそ真の社会主義政党であり、「西方の社会民主党に欠けていた一切の革命的な名譽と行動力とは、ボリシェビキによって代表された。かれらの十月蜂起は、単にロシア革命を救ったばかりでなく、国際社会主義の名譽をも救った」のである⁽¹⁾。

このように十月革命を高度にたたえると同時に、ローザはプロレタリアート独裁と社会主義的民主主義の問題で若干意見を異にしていたため、レーニンとボリシェビキに批判をくわえた。そのなかにはかなりするどい批判も含まれている。彼女は、ソビエトが「命令、工場監督官の独裁権、嚴罰、恐怖政治」を実施し、民主主義を取り消し、独裁をやり、民主主義を独裁と対立させたとして非難したのである。実際には、ローザのこの批判はボリシェビキのとった労働規律の強化、ブルジョア立法会議の解散、反動的諸党派の取り締まりなどに向けられたものであった。この種の批判が事実とそぐわず、一面的なものであり、したがって誤りであることはいうまでもない。これは彼女がロシア革命の直面したきびしい状況をあまり了解せず、十月革命当初における階級闘争の複雑さ、熾

烈さを認識できず、新生のソビエト政権を固めるためにとったポリシェビキの正当かつ必要な措置を理解できなかったことによる。公平にみて、ローザのこの誤りは偶然によるところが多く、文中に展開された思想全般からいって非本質的な支流というべきであろう。事実、獄中から釈放されてドイツ十一月革命に身を投じたのちのローザは、自己のいくつかの論断の一面性に気づき、実践のなかでその一部を修正している。したがって、この期のローザの思想観点を分析する場合、その発展変化をも考慮に入れ、のちの一連の関係記述と結びつけるべきではなかろうか。革命家のある誤りが敵に曲解され利用されたということは、革命運動のなかにあっては、よくあることである。これには、真剣に対処しなければならない。正しい態度はそのことから経験と教訓を汲み取り、革命が損失を蒙らないようにすべきであって、このことで問題自身の实事求是による評価に影響するようであってはならない。

ローザは確かにポリシェビキ批判の面で誤りを犯しているが、他面プロレタリアート独裁と社会主義的民主主義について少なからぬすぐれた見解をもっている。この点はこれまで長い間見過されてきたが、今日正視し、実際に即して確認し、学びとるべきものである。その主要な点をみてみよう。

ローザはプロレタリア革命とプロレタリアート独裁の学説を擁護して、いみじくもこう述べている——プロレタリアート独裁の根本的標識と条件は「ブルジョア社会の既得権利と経済関係に対する断固たる侵害であり」、「あらゆる政治権力を——プロレタリアートの革命的多数という意味で、またその意志により、したがって社会主義的民主主義の精神において——社会主義実現のために、資本家階級の剥奪のために行使することなのだ」⁽²⁾。この種の侵害と剥奪がないなら、社会主義革命と建設の成功はありえない。ここにプロレタリアート独裁の本質のすべてがある、と⁽³⁾。

ローザは完璧な社会主義的民主主義をつくることをプロレタリアートの歴史的使命とみなした。彼女は書いた——「権力を握ったプロレタリアートの歴史的使命は、ブルジョア民主主義の代りに社会主義的民主主義を創造すること」である、と。独裁と民主主義の統一の観点から、ローザはいみじくもカウツキーが故意に他人を煙にまき、「独裁か、それとも民主主義か」を宣揚して両者を対立させ、十月革命を否定して、ブルジョア民主主義すなわちブルジョア独裁の永久化をたくらんだことを叱責している。彼女にすれば、カウツキーのこの種の言論は「自己に対する裏切りであり、インターナショナルに対する裏切りであり、革命に対する裏切り」なのであった。ローザはきっぱりとつぎのように宣言する——「今日、問題となるのは、民主主義か独裁か、ということではない。歴史の日程にのぼっている問題は、ブルジョア民主主義か社会主義的民主主義か、という問題である」⁽⁴⁾と。社会主義的民主主義はブルジョア民主主義の廃墟のうえに立つものであり、「新しい社会的内容」で満たされた人民民主主義である。「人民大衆のすべてが国家の公的生活にくわわらなければならない」、かれらは「自己のすべての政治・経済生活の主人公であり、かつ目的意識的に、自由な自決においてこの全生活の指導に当たるであろう」⁽⁵⁾。しかしここでローザが、完璧な社会主義的民主主義は「社会主義政党が権力を奪取すると同時に始まるものである」としているのは、科学的正確さを欠いており、これをもってポリシェビキが民主主義を取り消したと論じるのはなおさら道理を欠いているといわねばならない。

社会主義的民主主義はプロレタリアート独裁の国の根本的な制度であり、それはプロレタリアートと勤労人民が主人公となって国家を管理することをいう。ローザは民主主義と自由の実施を高度に重要視し、それをプロレタリア政治の根本とみなした。「どういう国にしろ、政治生活の民主的

形態というものは、事実上、社会主義政治の最も貴重な、いや、その欠くべからざる基礎なのである」。これはプロレタリアート独裁国家の性格に由来する。したがって、ソビエト国家に対するポリシェビキの指導の最も主要な内容は、人民民主主義を真剣に実行して、人民の民主的諸権利を守り、人民大衆をして真の主人公たらしめるにある、とローザは考えた。したがって、「普通選挙、何物にも妨げられぬ出版および集会の自由、自由な論争」、これがなければ「広はん人民大衆による支配はまったく考えられず」、社会主義は想像だにできない、と。ローザが社会主義的民主主義と自由の実施を重視したこと、これは異議を唱える余地のないものであり、正しいものである。しかし、かの女がこの種の民主主義と自由を「無制限」の自由、「何物にも妨げられぬ」自由とみなしたこと、これには大いに異議を唱えてしかるべきであろう。なぜなら、「無制限」の自由なるものは歴史上かつてなかったからであり、いかなる自由も歴史的に生まれ、具体的なものであり、条件のあるものであり、したがって制限のあるものであるからである。社会主義社会の民主主義と自由もこの例にもれない。つぎに、自由を強調するに際して、ローザは自由と規律との、民主主義と集中との対立関係を軽視し、自由に対する規律、民主主義に対する集中の制約と拘束を見落している。また、かの女が革命後即時普通選挙をおこなうよう主張し、これでソビエトが民主主義を実施したかどうかを計ったことも、ロシアの当時の実際からかけ離れ、ドイツの条件をもとにして判断していたといえよう。これらはいずれも理論上の欠陥で、妥当を欠くものであった。

ローザは実践の観点を堅持して、次のように述べている——社会主義は斬新な経済的、社会的、法的体系であり、その実践的実現はまだ「まったく未来の霧につつまれている問題」なのである。綱領にもりこまれたものは「政策をすすめるべき方向を指

示する僅かの主要な道しるべに過ぎず」、これを除いては、いかなる出来合いの処方箋、出来合いの方針もありえない。したがって、社会主義はその本質からして、「強要されたり、命令によって実施されたりするものではなく」、実践のなかで「一步一步、手探りしたり、試したり、実験したり、あれこれやってみて」、交流を通じて、経験を総括し蓄積するほかない。収奪者に対する収奪は法令や「強制手段」の形をとることができるが、「肯定的なもの、つまり建設は、そうはいかない。ここは処女地で、問題が無数にあるのだ。経験のみが誤りを訂正することができ、新しい道を切り開くことができる。湧き立つ生活のみが、無数の新しい形式と発意を生み、創造的な力を保ち、みずから一切の失敗を正すことができるのである」。実践にもとづき、実践を通じて社会主義経済建設の客観的法則をさぐることに、また大衆を信じ、彼らに依拠してその積極性を十分に引き出すこと。以上がローザが「ロシア革命論」において提起し、今日現実的意義を有するマルクス主義の観点なのである。

ローザはまた、社会主義的民主主義は人民の政治的経済的権利であるばかりでなく、人民が自己を教育するための手段であるとした。彼女は、人民が自己の国家を持てば、民主的な方法で自己を教育し改造し、逐次旧い習慣の力の影響の束縛からぬけ出して、新社会の需要に適応できると考えた。ローザはこう書いている——「社会主義の実践は、数世紀にわたるブルジョア的階級支配によって退化した大衆の全体的な精神的転換を要求する。利己的本能の代りに社会的本能を、怠惰の代りに大衆の創意を、あらゆる苦難を無視する理想主義などを」。そして、ポリシェビキが勇氣と決意とをもって立ち向かった課題こそ、「大衆の最高度の政治的訓練と、政治的自由がなければ断じて獲得することの不可能な経験の集積を必要とするものなのである」。したがって、全

公民に深くつっこんだこまやかな政治思想教育を
 ほどこすことは、生命の源泉であり、空気であっ
 て、これがなければ、プロレタリアート独裁は存
 続しえないのだ。換言すれば、「プロレタリアート
 の過半数の自覚ある意志と自覚ある行為を抜きに
 しては、社会主義はない」⁽⁶⁾。これは、ローザ
 が社会主義を論じた際にくりかえし強調したきわ
 めて大切な点である。彼女はこう見ていた——ブ
 ロレタリアート独裁の社会主義国家はきわめて高
 度な精神的文明と道徳的風習——もっとも高尚な
 理想主義、もっとも厳格な自己規制、真の公民感
 ——とを有し、公民の一人ひとりが「工場主の鞭
 なくしてよく働き、資本家の監督官なくして高度
 の生産性を上げ、奴隷のように強制されることなく
 規律をよく守り、支配なくして秩序がある」⁽⁷⁾
 ようなそういう国家なのであった。

「政府の支持者、或る政党のメンバーのみの自
 由というものは——支持者やメンバーがいかに多
 かろうと——決して自由ではない。自由は、つね
 に、思想を異にするものの自由である」これは、
 各国のローザ研究者の間でいまも争われている、
 自由についてのローザのことばである。それぞれの
 立場によって、これを名言に数える学者もおれば、
 絶対的自由を唱道し、ひいては反革命の自由を
 寛容する「危険なことば」として否定する学者も
 いて、ほめたりけなしたりまちまちである。ここ
 で指摘すべきことは、この論述が条件と範囲を
 限定せず理論的に厳密でなく、いろいろな意味に
 解釈でき、異なる結論を要する表現だと言えよう。
 しかし、ローザの論述の文脈とその思想の全般的
 傾向からその実際の意味を理解するなら、公正に
 言って、一般の意義での少数による意見留保の権
 利と批判の自由を除いて、特殊な意義における反
 動派以外のすべての人民の享有する政治的民主主
 義の自由の権利を含んだ人民内部の範疇にのみあ
 てはまると見るべきではなかろうか。言うまでも
 なく、人民という概念は、異なった国家と、それ

ぞれの国家の異なった歴史的時期において、異な
 った内容をもつから、具体的に分析しなければならない。
 革命の時期には、とくにそうである。

反革命分子に対しては、ローザは愛憎が明らか
 で、立場がしっかりしており、プロレタリアート
 独裁の二つの面のうち敵に対する独裁という面の
 役割を強調している。ソビエト政府が革命と建設
 の敵に対して、政治的権利の剥奪や経済的生活手
 段の収奪を含むきびしい制裁をおこない、「鉄腕
 をもって反抗を打ち破る」ことに、ローザはまっ
 たく賛成であった。「全体のためにある政策を強
 行したり防止したりするためなら、いかなる権力
 の行使も躊躇する必要のない社会主義独裁がここ
 に現われている」。ローザを指して絶対的自由、
 超階級的自由の提唱者であるかのように云々する
 のは不公平ではないかと思う。

ローザは、たとえプロレタリアート独裁の国家
 でも、革命が前進を止め、国家も変色する可能性
 があるものと考えた。これは「ロシア革命論」の
 提起した、見通しのある見解である。ローザによ
 ると、民主主義と自由への渴望と要求は、決して
 「『正義』への狂信のゆえではなく、政治的自由
 がわれわれを教え、われわれを正し、われわれを
 浄める力、それらがすべてこの本質に懸っている
 ゆえんであって、万一、『自由』が私有財産にな
 れば、その働きは失われる」のだった。それはあ
 たかも、日光が病気の感染や病菌に対するも
 っとも効果的な消毒治癒の手段であるように、
 「革命そのもの、その人間変革力、革命によ
 って呼びさまされた大衆の精神生活、積極性、
 自己責任、その形式としてもっとも広はん政治
 的自由こそ、治療し消毒する唯一の太陽なのであ
 る」。未来を予言するかのように、彼女はこう述
 べている——もし民主主義が抑圧され、自由が特
 権と化し、独断専行が大衆の智慧に取って替わる
 なら、すべての精神的富と生き生きとした進歩へ
 の源泉はとぎされ、ソビエト国家は災難に直面す

ることとなろう。あらゆる公的制度における生活はしだいに萎縮し、貧困化し、低能率となり、偽りのものとなり、「官僚だけが制度の活動的要素として残ることになる」。何人といえども、この法則を免れない、と。ローザのこの論断は深刻であり、禍いを未然に防ごうとする有益な忠告が含まれている。

さればこそ、プロレタリアート独裁の問題で、ローザは民主主義の地位と役割をとみに強調し、独裁は「社会主義の意味での民主主義にはかならず」⁽⁸⁾、「民主主義の適用方法」にはかならないと述べる。ローザにすれば真の独裁は階級の独裁、階級の事業でなければならず、「階級の名のもとにおこなわれる少数の指導者の活動たるべきものではない」のである。「すなわち一步一步、大衆の積極的参加から生まれ、大衆の直接的影響力のもとに立ち、全公衆の統制」、「無制限の公共的統制」にしたがうべきで、これこそ官僚主義を防止し、革命を推進する根本的な措置なのである。さもなければ、「経験の交換は、新政府の官僚の封鎖的なワクのなかでおこなわれるにとどまり、腐敗は不可避である」。人民大衆を遠ざけ、「尽きることを知らぬエネルギーと限りない理想主義とをもつ2、3ダースの党指導者が支配と統治をおこない、実際には、その中の1ダースほどの卓越した人たちが指導して、労働者のエリートは、時折、会議に召集されて、指導者の演説に拍手をおくり、提出された決議に満場一致で賛成する…これも独裁にはちがいないが、しかしプロレタリアートの独裁ではなく、一握りの政治家の独裁、つまり、ブルジョア的意味における独裁、ジャコバン支配の意味における独裁である」。この種の独裁のもとにあっては、社会は墮落し、道徳はすたれよう。再生への唯一の途は、大衆の理想主義と社会的積極性、政治的自由のみである、と。プロレタリアート独裁の腐敗変質の可能性についてのローザの上述の論断は、大きな現実的意義と理

論的価値をもつものといわねばならない。これは彼女が一貫して人民大衆のイニシアチブの精神の発揚に重きを置いたことから来る論理にかなった必然の結論である。だが、ここでも、彼女は階級の独裁、下から上への民主的監督を強調するとき、それを絶対化して、「大衆、階級、政党指導者」の弁証法的統一関係と一致性を忘れている。これは理論上一面的である。この誤りは、彼女が長年らい大衆運動の自然発生性を過度に強調してきたことと切り離せない。もとより、大きな困難のもとで書かれたローザの原稿に完全さを求めるべきではないが、しかしその理論上の欠陥には必要な注意を払わねばならない。

ローザは、「われわれは、社会主義やマルクス主義の偶像崇拝者であったことは一度もない」と述べている。彼女に言わせると、十月革命から学ぶには、「無批判な弁護論ではなく、思慮ある徹底的批判のみが、経験や教訓の宝を掘り出すことができる」。これは、彼女がロシア革命を評論するさい一貫してつらぬいたマルクス主義の思想原則である。ローザは、ロシアのプロレタリアートとその政党が立てた不朽の歴史的功績を十分に肯定した。だが、彼女はこれによって人びとが権威のとりこになって、十月革命のすべての経験をことごとく神聖化し絶対化し、これを「社会主義的戦術のモデルとして、国際プロレタリアートに模倣させる」ことに反対した。それは「危険をとまなう」「ありがた迷惑」なのである。なぜなら、ボリシェビキの革命は、孤立した、戦争によって消耗しきった、帝国主義に喉くびを締め上げられ、第二インターに裏切られたそういう国で起こった革命である。「こういう状態のもとで申し分のない民主主義、完全無欠のプロレタリアート独裁、花咲く社会主義経済を魔法によって作り出すことをレーニンやその同志たちに期待するということは、かれらに超人間的なものを求めるようなものである」。ローザはつづけていう——「大切な

は、ボリシェビキの政策のうち、本質的なものを非本質的なものから、核心になるものを偶然的なものから区別し」、そのなかから普遍的意義をもつ法則性を見出し、自国の実情に合わせて政策と戦術とを制定し、社会主義運動を推進させることである、と。国際共産主義運動史とプロレタリアート独裁史上、レーニンを除いて、ローザが唯物弁証法を用いて、十月革命の経験を客観的にしかも深くつっこんで総括した最初の人であったということ、これは特筆すべきことであろう。実際に即して事をはこぶというローザのこの科学的批判的態度は、当時なかなか得がたいものであったばかりでなく、今日、他国の経験を学ぶうえでも鏡となるべきものである。

しかし、レーニンに対するローザの批判は適確でない。ほかでもなく、ローザの批判したレーニンこそ、人民が歴史を創造するという歴史唯物主義の観点に一貫して立ち、敵に対する独裁と人民に対する民主主義の面とを有機的に結びつけてきたからである。十月革命が勝利して間もなく、レーニンは「ソビエト政権の当面の任務」（1918年3－4月の間に書かれ、ローザもそのあらましに目を通している）のなかで、「幾千万の勤労被搾取者を動員して新しい民主主義を実行することによって、国家の管理に自主的に参加させる」という任務を提起し、「われわれボリシェビキ党はすでにロシアを説得した。われわれは貧乏人のために金持の手から、勤労者のために搾取者の手から、ロシアをたたかいとった。いまは、われわれはロシアを管理しなければならない」⁽⁹⁾と書いている。かれにとっては、ソビエト政権の樹立は任務の「小部分」に過ぎず、もっと主要で困難な任務は、経済面、つまり国民経済の分野において社会主義の秩序をうち立てることにあつた。レーニンはこう書いている——これも一つの革命である。しかも、この革命は「人民の大多数、まず第一に勤労者の大多数が、自主的に歴史創造活動をおこ

なつてはじめて」、「プロレタリアートと貧農が、自覚、思想性、献身、不屈さを、十分に具現することができてはじめて」、その勝利が保障されるであろう。有効に国家を管理し、生産を組織するために、レーニンは経済の分野その他の社会の分野でも真に民主集中制を実施することを主張した。「われわれの当面の任務は、はかならぬこの民主主義的中央集権制を経済の分野で実現し……経済企業がその機能をはたすうえで完全な整然さと統一を確保することであるが、同時に、真に民主主義的な意味に理解された中央集権制は、地方的特性だけでなく、地方的発意、地方的創意、共通の目標をめざす多種多様な方途、方法および手段をも完全に、支障なく発展させるという、歴史によってはじめてつくりだされた可能性を前提とするものである」⁽¹⁰⁾。なお、つけくわえておくべきことは、ローザの指摘するソビエトの機構内部に生じつつあつた若干の悪習については、レーニン自身すでに気付いていたということである。かれはこう書いている——現在、ソビエトの代議員を「国会議員」または官僚に変えようとする傾向があるが、この種の傾向を食い止めねばならず、大衆と密切に結びつかなければならない。この「ソビエト政権を害するごくわずかな可能性をもことごとくなくすために、また繰り返ししつこく生えてくる官僚主義の雑草を根絶するために、下からの統制の形態と方法とはますます多様でなければならない」⁽¹¹⁾と。ただ帝国主義列強によって引き起こされた武力干渉と国内戦争の勃発によって、レーニンはソビエトの政権建設を一時中断せざるを得なかった。のち、とりわけ晩年に、「政治的遺書」とよばれた一連の論著で、レーニンはふたたび上述の問題に立ちもどり、ソビエトと党内に頭をもたげつつあつたひきのばし作風や官僚主義などの悪習を仮借なく暴露し、これとたゆまぬ闘争をすすめた。惜しいことに、レーニンはこれを解決することなくして世を去った。

以上に述べたことから、つぎの結論が引き出せるものと思う。ローザとレーニンはプロレタリア革命とプロレタリア独裁の根本問題においては、その観点を一にしており、これが両者の間の主要点であり、第一義的なものである。彼女とレーニンとの間の意見の相違、ひいては論争は、原則面での対立であるというよりは、異なる角度から物事を観察し、分析したことに由来しており、戦術上の相違であって、第二義的なものである。修正主義の悪罵と攻撃とを同日に論じることができない。ローザのポリシェビキ批判に誤りがあったとはいえ、しかしそれは彼女がマルクス主義の発展に寄与するのを妨げるものではなかった。したがって、ある意味では、ローザとレーニンとの観点は、とどのつまり、互いに対立し、排斥しあうものではなく、互いに補足し、補完しあうものである。

※ ※ ※

ローザ・ルクセンブルクは、国際共産主義運動に大きな足跡をのこした独特な風格のあるプロレタリア革命家である。革命家として、ローザはその48年の短い生涯を、西欧とりわけドイツとポーランドの革命運動にささげて巨大な貢献をなし、レーニンをして「世界プロレタリア革命の傑出した指導者」⁽¹²⁾、「偉大な共産主義者」⁽¹³⁾といわしめた。しかしながら、理論家としてのローザに対する評価は、ここ半世紀余りの間、主として国際共産主義運動における「個人崇拜」と極左思潮に影響され、また理論認識面における彼女の若干の限界も原因して、いく度か変動し、意見を異にしたため、論争が絶えなかった。ローザの一部のきわめて貴重な思想的遺産もこのため正しく評価されることがなかった。わけでもレーニンと意見を異にし、レーニンとポリシェビキを批判したローザの「ロシア革命論」等の論著は、不当にも一部の国で冷遇され、長期にわたって「国禁の書」とされてきた。レーニンと意見を異にし、論争のあ

ったすべての問題で、ローザが誤っていると、形而上学的に頭からきめてかかっている人も多い。そのため長期にわたって理論的価値を有し、すでに実践によってその正しさが証明された彼女の若干の論断も捨て去られた。こうした偏見は、かなり長い間、国際共産主義運動史をほぼ左右し、スターリン死後の50年代中期にまでおよんだ。60年代以後、こうしたよくない影響の排除と国際共産主義運動における正反両面の経験の総括の基礎の上に、人びとの思想も次第に解放され、視野もいっそう広がり、実際に即して事をはこぶという精神にもとづいて、ローザとその思想を再評価する気運が高まり、多年の努力の末、あるていど積極的な成果をおさめるようになった。しかし、さまざまな異なる見解、思想のあいだで、いまなお論争がつづけられている。

レーニンは、エンゲルスなきあとの国際共産主義運動のもっとも偉大な指導者である。かれは、ローザの犯した理論上、実践上の誤りを一再ならず指摘してきたが、にもかかわらず彼女を高く評価していた。1922年、ドイツ共産党を離れたレーヴィが下心をもってローザの遺稿「ロシア革命論」を公開すると、レーニンはすぐそれに応じて「政治家の覚え書」という有名な文章を書き、レーヴィがそれでポリシェビキを非難しようとした卑劣な行為を徹底的に暴露した。かれはロシアの寓話の一句を引いて、ローザと日和見主義者をつぎのように対比している——「鷺はめんどりより低く下りることもあるが、しかしめんどりは決して鷺のようには飛び上がれない」。ローザは誤りを犯したとはいえ、「やはり鷺であったし、いまでも鷺である。そして彼女についての記憶が、つねに全世界の共産主義にとって貴重であるだけでなく、彼女の伝記と、彼女の著作の全集〔中略〕は、全世界の共産主義者の多くの世代を教育するうえに、もっとも有益な教訓となるであろう」⁽¹⁴⁾。レーニンは「ロシア革命論」の誤りを指摘したが

(同時に、彼女は誤りの多くを修正したともいうている)、しかしこれを彼女の有益な著作から除外するようなことはしていない。レーニンが史的唯物論の立場からおこなったこの評価は、ローザとその思想を再検討し評価するうえで、重視しなければならないものといえよう。

〔注〕

- (1) 『ロシア革命論』1963年西ドイツ・ヨーロッパ出版社ドイツ語版。以下関係引用文はいずれもこれに拠る。
- (2) 「国民議会」『ローザ・ルクセンブルク講演と論文選集』1952年ベルリン・ドイツ語版第2巻606ページ。
- (3) まずこの点をあげた理由は二つ。一つは、先の引用文(「ロシア革命論」)の中国訳と日本語がちょうどさかさまであること。二つは、ローザは社会主義的民主主義をその本質から理解しており、レーニンのいう「民主主義では少数が多数に服役する国家である」という命題と一致していること。一は「然り、独裁である。だがこの独裁は、民主主義の適用方法であって、その廃棄のことではない。ブルジョア社会が見事に獲得した権利や経済的關係——これを欠いては社会主義革命は実現され得ない——に対する精力的な断固たる侵害のことではない」(『ローザ・ルクセンブルク選集』現代思潮社版第4巻262ページ。二は、東独ラシツターの批判。
- (4) (2)に同じ。
- (5) 「スパルタクス同盟はなにをのぞむか」『ローザ・ルクセンブルク全集』第4巻444ページ。
- (6) (2)に同じ。
- (7) 「スパルタクス同盟はなにをのぞむか」『ローザ・ルクセンブルク全集』第4巻445ページ。
- (8) (2)に同じ。
- (9) 「ソビエト政権の当面の任務」『レーニン全集』第27巻。

- (10) 「『ソビエト政権の当面の任務』の最初の原稿」『レーニン全集』第27巻。
- (11) (9)に同じ。
- (12) 「ヨーロッパ・アメリカ労働者への手紙」『レーニン全集』第28巻。
- (13) 「政論家の覚え書」『レーニン全集』第32巻。
- (14) (13)に同じ。

(21頁からつづく)

う保証もない。といって五当召を見ずに北京に帰るのも、なんとなく業腹であるので、6月1日のうちに賓館でたのんでおいた6月2日の北京行きの2等寝台券がとれば、北京出発まえの約束であった北京大学中文系のG先生に北京到着の列車と時刻をウナ電でうち、6月2日の朝はやく、100元はかかるというタクシーをたのんで見学に出かけようと思っていた。切符がとれたのが、6月2日の午前10時過ぎ、午後6時8分包頭発であるから万事休すである。包頭の旅遊地図が手にはいったのを唯一の収獲として、仕方なく北京にもどったのである。

このたびの節約旅行の予算をたてるとき、北京語言学院のG先生にうかがったところ、大学の招待所を利用するなら、汽車賃のほかに1日20元ないし25元、30元も用意すればかならずおつりがくると教えられた。その計算にもとづいて、1500元を用意して出かけたが、5月6日に出発し、6月3日に北京に帰ってみると、成都の四川師範大学のL先生宅での生活費を全然受けとっていただけなかったせいもあってか、使用した総額はなんと500元にも達していなかったのである。このたびの節約旅行はまあ成功したといえるが、7月、8月、10月の旅行が同じように成功するかは、まだ未知数である。(1986. 6. 10)